國學院大學学術情報リポジトリ

Study on the Origin and Development of Chinese Museology

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Lu, Peng
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000409

中国博物館学の濫觴と展開に関する研究

彭　露

はじめに

1935年に、中国の博物館学研究者や博物館関係者は、約半世紀に亙る博物館を実践した後、中国の博物館学は西洋の博物館学より独立し、中国独自の独立した科学としなければならないことを認識するに至った。それは、学術の視点からの体系的な中国博物館学の構築意識によるものであった。

当該期の博物館学に関する研究は、その後の中国での博物館学構築の上では大きな成果収めたが、しかしそこには様々な課題も存在していると看取される。

1935年、中国博物館協会が結成され、中国博物館学界は組織的且つ具体的な学術研究活動を目標するに至った。博物館学研究者にとっては、当時存在した博物館学に関する種々の疑問を解決する機会を得ることとなったのである。これを契機として、中国の博物館学界は、博物館学の科学としてのシステム構築の基盤がここに形成され、その成果は、現場である博物館の経営、諸機能にも大きな影響を与えることとなった。

現在、中国の博物館学界では、中国博物館学の濫觴期を明らかにし、中国博物館学史の形成を試みる思潮が盛んになってきている。学史の整理と研究を展開することは、中国博物館学の発展には極めて重要事項であると考える。換言すれば、西洋からの換骨奪胎をはかり中国の博物館の特徴に適合する博物館学の体系を模索してきた歴史を明らかにすることで、これからの中国博物館の将来像を求めることが出来ると思われる。

現在、濫觴期の中国博物館学について、一部の中国学者には当該期の博物館学研究の段階がまだまだ脆弱な段階にあるという意見もあり、当該期の基礎理論と実践的技術に対する研究は未成熟で、完全な科学システムを支え得る状況に至っていないといった、自虐的な意見も多数あることも事実である。

本稿は、中国博物館学の濫觴期から揺籃期における中国博物館学の基礎理論・学術著論・専門チームの構成・学芸員養成・学術交流などの多方面から、中国博

物館学界が目標とした博物館学のシステム構築の到達点と課題を具体的に分析することにより、中国の博物館学史の検証・中国の博物館学構築の一助となることを目的とするものである。さらに、この過程において明らかとなった博物館学への取り組みの成果は、現在も継続して行われている中国の博物館学の構築作業の重要な資料として、参考と警告の役割を果たすことになると考える。

第一章　「博物館」「博物館学」について

抑々中国にとって、博物館や博物館学は西洋から輸入された文化であり、輸入思想である。19世紀中頃に博物館と博物館学は、西洋から中国に伝播し、現在に至っても進展している文化・教育思想であり、現在では博物館学は独立した学域として把握されるに至っている。

博物館学が独立した学域を持ったために、項隆元は、「一种学**问**要成**为**一门独立的学科，必**须**有一整套**术语**来描述其研究**对**象、目的、方法、**规**律、定律的基本概念。（一つの学問は独立する学になるなら、必ず一連の用語で研究対象、目的、方法、規則、法則の基本概念を描くことである。 筆者訳）」[(1)]と述べている。博物館学研究にとっても、最も重要なのは博物館学における専門用語の統一と当該名詞の定義とを明らかにすることであると考える。

本稿は、主に中国の博物館学に関する検討であり、博物館学の研究分野の中でも博物館学史に属するものである。その他に論を展開するにあたり、博物館学の中でいくつかの重要な概念を明確に定義することが必要である。先ずは、「博物館」と「博物館学」に関する概念について検討する。

第一節　中国での博物館の定義

現在、中国の博物館学界での博物館の定義は、一般的に採用されているのは1979年に国家文物局が公布した『省・市・自治区における博物館工作条例（草案）』[(2)]の中で記された博物館に関する定義である。内容に関する序文は以下の通りである。

> 博物**馆**是文物和**标**本的主要收藏机构，宣**传**教育机构和科学研究机构，是我国社会主**义**科学文化事**业**的重要**组**成部分。
>
> 博物館は文化財と標本の主要な収蔵する機構であり、教育を普及する機関と科学を研究する機構であり、中国における社会主義の科学、文化事業の重要な構成部分である。（筆者訳）

上記の定義は、1956年に文化部によって開催された全国博物館工作会議において調整された規定である。本定義に基づき中国が考える博物館を確認すると、博

物館の第一の目的は文化財と標本資料の収蔵であることが理解される。さらに、資料の活用は、国民の教育と研究に資するためとし、それらの活動は国家的施策として社会主義の文化事業として位置付けている。

さらに、1956年に北京で開催した中国の第１回全国博物館仕事会議の中で、中国博物館の基本的な性質は、科学研究機関・文化教育機関・有形文化財と無形文化財及び自然標本の収蔵室である「三性」と、科学研究と人民への奉仕を行う「二務」が博物館の基本的な役割であるとされ、「三性二務」(3)が提唱され、より具体的な目的が定められた。この「三性二務」の意図する博物館機能は、科学研究機能に軸足を置く点を特徴とする。

1980年代、中国の博物館学界は、上記の定義を検討した後、博物館の概念は科学研究機関であるとする考え方が定まってきたようにと看取される。それにより、1985年に費振倫が著した『中国博物館学概論』(4)と1993年に刊行された『中国大百科事典・文物博物館巻』(5)も同様な観点で著わされている。

2004に宋向光は、「博物館定義の時代発展の特徴」(6)の中で、上記の博物館の定義の評価を次の通りに行っている。

> 实事求是地讲，这一博物馆定义体现了当时我国博物馆的发展状况和工作环境，反映了计划经济对博物馆社会任务和运行方向的规定，反映了我国博物馆工作者对博物馆业务特点的认识。定义所反映的博物馆性质是博物馆在计划体制中的位置，博物馆任务则是根据博物馆发展状态和工作任务而制定的。
>
> ありのままに言えば、この博物館定義は当該期中国の博物館発展状況と仕事環境を発現し、計画経済が博物館の社会任務と運行方向の規定を反映し、中国の博物館学芸員が博物館業務の特徴に関する認識を反映していることである。定義を反映した博物館性質は計画体制の中で博物館を占めた位置であり、博物館の任務は博物館の発展状態と仕事の任務によって制定された。（筆者訳）

即ち、宋は、当該期の中国社会に整合する考え方ではあるが、博物館の定義は、当然社会状況によって変化し得るものであることを指摘した。博物館は、半世紀の発展を経た今日では、その定義もさらに充実して現在の社会情勢・社会文化に整合する状況に到達しているものと考える。

以上のような博物館の定義は、今日の中国の博物館学界が有する慣用的な定義であるが、本稿は中国博物館学濫觴期の博物館学に関する歴史研究を目指しているため、1949年以前に焦点を定める学界の博物館に関する定義を明確することが肝要であると考える。

『中国博物館学研究著述目録』(7)の統計によると、1949年以前の中国の博物館学の通論的な単行本は５冊を数える。具体的には1936年に出版された『博物館学通

論』、同じく1936年の『博物館学概論』、次いで翌1937年に上梓された『博物館』、1941年に出版された『博物館学大綱』、1943年の『博物館』である。上記の５冊の単行本の中で、1943年の『博物館』を除く4冊が博物館の定義を明確に現した著書である。

表１　1935年から1949年までの中国の博物館学の通論的な単行本一覧

出版年	著者名	書名	出版社
1936年	費畊雨・費鴻年	『博物館学概論』	中華書局
1936年	陳端志	『博物館学通論』	上海市博物館
1937年	陳端志	『博物館』	商務印書館
1941年	荊三林	『博物館学大綱』	中国文化服務社陝西分社
1943年	曾昭燏・李済	『博物館』	正中書局

1936に費鴻年は、『博物館学概論』[8]の中で、中国では始めてとなる博物館の定義を次のように記している。

> 博物**馆**乃保存最足以**说**明自然的**现**象，及人类的**业绩**等物品，利用之以**为**民众知**识**的向上，及文化事**业**的**发**展之一种**设**施。
> 博物館は自然現象と人間の業績を最も説明するものであり、民衆の知識の向上や発展文化に関する利益を保存するための施設の一種である。（筆者訳）

費による本定義は、アメリカのグード（George・Brown・Goode）の観点に従って論じたものであることを明記しており、中国の博物館学のスタート理念はアメリカ合衆国の博物館思想に準拠するものであったことは明白である。

同じく、1936に陳端志は、『博物館学通論』[9]の中で下記のとおり博物館を定義している。

> 博物**馆为**保存最易**说**明自然**现**象及人类**业绩**的物品，供民众知**识**的向上，及展文化所利用的一种**设**施。
> 博物館は自然現象、人間の業績などを保存している。民衆の知識の向上や文化事業の発展の一つ拠点利用する目的の施設である。（筆者訳）

ここでの陳の指摘は費の『博物館学概論』での定義と同一のものである。また、1937年に陳は２冊目の単行本である『博物館』[10]を上梓するが、ここでも『博物館学通論』での定義と変わることなく一致している。

1941年に荊三林は、『博物館学大綱』[11]の中で、費が用いたグードの定義理念を継承し、次の如く記している。

博物馆乃是保存最足以说明自然的现象及人类的业绩等物品，利用之以为民众知识的向上及文化事业。

博物館は自然の現象や人間の業績などを十分に説明するものを保存し、民衆の知識の向上や文化事業を利用することである。（筆者訳）

その後、下記の通り、定義の増強を計っている。

与促进整个社会的进化之一种设施。为政府经营的事业之一，而其中极富于学术的及教育的意味。

（博物館は）社会の進化を促進する施設の一つであり、政府が経営する事業の一つであり、その中には、学術的な及び教育的な意味がある。（筆者訳）

つまり、荊の考える博物館は、社会の進化を促進する施設であるとしたうえで、政府が経営する事業の一つであると断定し、博物館の設置・運営は政府の業務であるとした。

なお、1943に曾昭燏が著した『博物館』(12)においては、前述したように博物館の定義を直接には言及されではない。

1949年以前の中国博物館学界において博物館の定義は、1888年にアメリカのスミソニアン協会（Smithsonian Institution）のジョージ・ブラウン・グード（George・Brown・Goode）が提出した定義に従っていたことが看取できる。このグードの定義は、博物館の教育機能を強調し、博物館が市民教育を普及させる重要な場所であるとする博物館教育機関論とするものであった。この考え方は、当該期の中国博物館学界が博物館の教育機能を重視する姿勢と合致していた点から、中国では容易に受け入れることのできる博物館理念であった。

小結

上記の定義によって、「博物館」とは、公衆向けて開催された文化財と標本の収蔵・科学研究・教育宣伝する場所である。この後の社会の変化と時間の流れにより、博物館の定義は、より確実なものに整備されてきた。しかし、確かに博物館の機能に関する定義の変化は認められるが、博物館の理念に関しては原則的には不変であると言えよう。

即ち、博物館の原初形態は、個人が珍品を私有し保存に注意を払った。その観客は、民衆ではなく個人或いは少数の特権階級であった。しかし、博物館の利用者は個人ではなく、公衆の為に存在する機関であるとする考え方に則っている。さらに、博物館は収蔵保存の場所であるとともに、民衆のための教育普及と研究を展開する場所でもある。博物館が時代の発展につれてどのように変化しても、

その核心の概念は変化することは無いであろう。

第二節　中国での博物館学の定義

1993年刊行された『中国大百科事典・文物博物館巻』[13]において、「博物**馆**学是研究博物**馆**的性**质**、特征、社会功能、**实现**方法、**组织**博物事**业发**展**规**律的科学。（博物館学は、博物館の性質・特徴・社会的な機能・実現方法・組織管理と博物館事業の発展法則を研究する科学である。 筆者訳）」と指摘している。この定義は、中国の多くの博物館学者に受けられていることは事実である。

2001年、王宏均は『中国博物館学基礎』[14]において、上記の定義を賛成する。そして、博物館学は博物館システムだけでなく、博物館事業全般を研究すべきであると指摘する一方、博物館システムの研究は、博物館学研究の中核であると記している。筆者は、王の考え方に同調するものである。また同時に、『中国博物館学基礎』は、中国の大学の博物館学コースでよく使われる教材でもある。

前述した1949年以前に出版された５冊の単行本は、すべて博物館学についての明確な定義を記述しない。その理由として、当該期の中国では博物館学が構築されたばかりで探索している状況にあり、科学としての理論体系はまだまだ完成しておらず、博物館や博物館学の峻別すら出来得ない状態であったことに起因すると想定される。即ち、当該期の博物館学の理論は、西洋に学んだものであり、その内容も西洋の考え方をそのまま踏襲していたと思われる。

小結

博物館学の定義は、博物館学の定義は一定ではなく、時間の経過と社会情勢の移行に従って、絶え間なく改善と補足説明することにより変容するものと考えられる。それは、博物館に関する問題を報うことは、博物館学の範疇に含まれるからであり、考古学において遺跡を発掘調査をすることも、その調査により出土された資料の復元や各種の分析を行うことも、考古学であることと同様であると考える。

博物館学は、範囲が広く、それ故に研究内容も焦点も多様であるため、その定義も変化しつつ次第に確立されるものと考えられる。

本章で扱った1949年以前という限られた期間において、中国及び世界の博物館学界が「博物館学」と「博物館」の双方に関して明確な定義と概念が明確でなかったというのが当時の状況であった。

この原因は、西洋においても当該期の博物館学は博物館学実践技術の分野を指していることが多いため、博物館学理論の研究については、まだ々不十分である可能性も考えられるのである。

第二章　中国博物館学の濫觴

現在、中国博物館学の嚆矢については、三種の学説がある。それは、1905年説、1930年代説と1980年代説である。

①1905年説

1905年説は、1905年に張謇が南通博物苑を創設したことを、中国の博物館学の始動期であると考えるもので、学界において主流をなす考え方である。

19世紀に西洋の博物館観念が中国に伝わり、中国において始めての博物館が、1868年フランスの天主教イエズス会の神父のピエール・マリー・ウード（Pierre Marie Heude）の手によりが建設した上海自然歴史博物館が設立された。この後、中国において外国人によって数多くの博物館を設立される。これらの外国人が設置した博物館の設立した要因は、本国であるフランスで考えられていた博物館の理念であった。博物館理念は、中国での定着化することはなかったが、近代の博物館についての考え方を、中国国民に齎したことになった。このような社会情勢をうけて、1905年に張謇が創立した南通博物苑は、初めて中国人自らが創立した博物館であったのである。

2006年に梁吉生は、張が行った博物館の設立に関して次のように評価を記している[15]。

> 张謇作为中国博物馆启蒙思想家，基于对什么是博物馆，怎么建设博物馆等现实问题的思考，提出了办馆宗旨和经营理念，创造了中国博物馆模式。张謇的博物馆思想最早地为博物馆学注入了本土化基因，也可以说是中国博物馆学最基础的奠基。
>
> 張謇は、初めての中国博物館の啓蒙思想家として、『博物館とは』、『どのように博物館を設置するのか』などの現実的な問題に基づいて、博物館の趣旨と経営理念を提出し、中国の博物館の模範を創造した。張謇の博物館思想は、博物館学に本土（中国）の特徴を最も早く注入したことである。つまり、これが中国博物館学の最も基礎となる定礎である。（筆者訳）

梁は、張謇の博物館理念を継承するとともに、その理念の具現化として設置された南通博物苑も高く評価している。南通博物苑は、中国のみの文化的な価値によって設置されたものではなく、中国文明と世界文化を組み合わせているのである。このような新しい取り組み方は、南通博物苑が当時の中国国民の知識追求と基本的な娯楽要求に基づき出現された事は、中国の歴史上画期的な意味を有すると考えられる。

②1930年代説

1930年代説は、1935年の中国博物館協会の成立を、中国博物館学の始動期とす

る考え方である。これは、中国博物館協会の成立が中国の博物館学研究において、専門化・標準化・学術化をもたらし、さらに博物館学の研究範囲に合致しているとの考え方に拠る。しかし、王宏均は、「中国学者**対**博物**馆**学的学**术**意**义**上的研究，30年代才是真正起步的**阶**段。（中国の学者が博物館学を学術的に研究し始めたのは、30年代初期の段階が妥当である。 筆者訳）」[16]と述べている。博物館学についてのシステム化と標準化を行う研究は、学問とする内容を探究するだけではなく、具体的な理論の方面で意識的に中国の博物館学の枠組みを構築することだと筆者は考える。したがって、1930年代を中国の博物館学の始動期とすることは、適正ではないと考えるものである。

理由は、1930年代のこの時期については、筆者は別の観点を持っており、次章で詳細を述べることとする。

③1980年代説

最後の1980年代説は、中国の博物館学は、学問の意味での本格的なスタートを文物局の研究資料室が出版した『文物通信』を始まりと見なす考え方である。『文物通信』は、率先して博物館学の研究を掲載した啓蒙書であり、創刊は1979年10月のことであった。

1981年には、国家文物局が博物館学討論会を主催して、『博物館学概論（質問稿）』[17]を編纂している。さらに、1985に出版された『中国博物館学概論』の「頭書」の中で、「研究中国博物**馆**事**业**的基**础**理**论**和工作方法的学**问**，就是中国博物**馆**学。（中国の博物館事業の基礎理論と活動の学問的研究が、中国の博物館学である。 筆者訳）」[18]と明確に指摘している。さらに、初めて博物館学の命題を博物館事業の基礎理論と活動の学問的研究であると提言した点が特徴であった。

それから、1983年に中国は、国際博物館会議加盟国となり、1998年に教育部が発布した高等学校の本科専門目録の中で、博物館学が二級学科になることが規定された。これは、国家が初めて博物館学の地位を明確にしたものであった。当該期は、1930年代に西洋博物館学に鑑みることと，1950年代にソビエト連邦博物館学に鑑みることを脱皮し、中国の独自性を求めた博物館学を詮索した結果であったと考える。

本稿において先に資料として紹介した５冊の単行本において、濫觴期に設立された博物館の評価は、下表の通りである。

表２　先行研究書に見る濫觴期の中国博物館一覧表

出典	博物館	設立年	設置母体	評価
『博物館学概論』	自然史博物館	1927年	中央研究院	中国博物館事業の萌芽
	博物館	1931年	北平研究院	
『博物館学通論』	南通博物苑	1905年	私立	中国の博物館事業の濫觴
	北平古物陳列所	1914年	国立	初めての中国政府が経営する博物館事業
曾氏『博物館』	南通博物苑	1905年	私立	中国の博物館事業の嚆矢

小結

「博物館学」とは、博物館の全てに関する研究学域であり、全ての博物館に関する研究と調査は、博物館学の研究分野に含めるものと思料する。1905年に張謇が南通博物苑を創立したことは、中国人らが自主的に博物館事業を実践したことであり、広義の意味での博物館学の範疇に含まれる歴史的事項でもあった。かかる観点から、筆者は中国博物館学の濫觴は1905年説が適当であると考える。

第三章　中国博物館学の構築の濫觴

第一節　博物館学の構築の定義

「博物館学科の属性に関する初歩的な探究――及び範広傑先生と検討すること」[19]によれば、博物館を研究する多くの者たちは、博物館学を総合学科と縁辺学科に仕分し、独立するひとつの学問と見なすようになっていると述べている。しかし、博物館学と学科における博物館学の構築は、全く異なることであると考える。陳建明は、「博物**馆**学是一门已具有学科基**础**并正在建**设**之中的科学学科。（博物館学は、すでに学とする基礎があり、建設中の科学的な学である。　筆者訳）」[20]と述べている。これは、博物館研究についての理論と実践の内容を包含し範囲は広く、博物館学研究者らが博物館事業の発展と研究を指導する内容及び博物館実践についての学域は博物館学の内容であると言えよう。そして、本論文で検討した対象は、博物館学の構築である。博物館学の定義は、第一章第二節で明確にしており、これからは博物館学の構築の定義を明確にすることが必要だと思う。

①学問の構築とその標識

学問とは、全体の科学体系の中の一つの科学の分野であり、学術が独立し、理論体系の完備を意味する。博物館学は、学術の上での分類の名称で、大学の中で教育科目を設置する点が基礎である。故に、学問の構築とは、抽象的な学を具象化する過程である。多岐に亙る要件を、仮設と論証により、推定と評価できる内容を条件とし、学の独立性と完全性を構築することである。

学問の構築は、基礎性と総合性を持っているシステムであり、学科の発展、学術団体、基礎理論、学術著述、科学研究、専門人材の養成などのいくつかの方面を網羅するものでなければならない。その目的は、学の基礎を完璧して、学のレベルを高めるのである。

しかし、学問の構築の標準に関する定説は未だない。科学の哲学原理によって、学の形成を確認したのは、主に次に記したいくつかの標識である。

第１点は、研究する対象がある程度定められた領域が出来ており、多くの研究者が存在し、その領域の研究が行われていること。第２は、学術著述や関連刊行物が出版されていることである。第３は、従属的な学術会議が開催されて、学術交流を実施することである。第４は、学科が大学の専攻となり、専門の人材を養

成することなどが必要条件として挙げられよう。学科の形成と発展は、様々な基準がある。

学科の基本的な内包、研究対象、学の性質、研究方法、理論体係などという他の観点もある。学の構築の基準は、多くの方面を含める。ある一つの面で学の構築を判定するのは、不公正という点で欠陥があることを避けられない。したがって、学の構築の中に含まれる基礎理論・学術団体・学術著述・専門教育・科学研究・学術交流などの多くの方面で共通的に判定することが適切である。

②博物館学の構築

『中国博物館基礎』[21]によると、国際博物館学委員会の元主席であるスイスの博物館学者のMartin R. Schärerは、博物館学に付いて次の通り記している。

> 博物**馆**学要成**为**一个学科必**须**使博物**馆这**个**专业**群体接受博物**馆**学，并且，当前最重要的是博物**馆**学**应**在大学中有一席之地，要有人去研究它。作**为**科学，首先要有**专业语汇**体系，第二要有**逻辑**体系，第三要有学科独立性或称排他性。
>
> 博物館学がひとつの学問であるなれば、博物館という専門的な群体は博物館学を必ず学ばなければならない。そして、今最も重要なのは、博物館学が学問としての位置を得て、博物館学を研究な人が居ることである。科学として、先ずは、専門の用語の体系が必要である。次には、ロジックの体系がある。最後には、学問としての独立性であり、あるいは排他性である。（筆者訳）

上記の学の構築に関する認識によって、博物館学の構築の意味は明確にされている。博物館学の構築とは、博物館学の内容をまとめて整理して、より学術化と標準化の理論体系を有さねばならない点である。専門的な学術組織に依拠して科学研究を行ない、学術著述の出版・学芸員の養成・博物館事業と博物館実践に関する研究と指導・博物館の活動を、より良いものを目指す過程である。博物館学の構築は、長い過程であり、学芸員が心血を注いで努力を払う必要がある。中国の博物館学は、スタートの遅れによって、学問の構築のため、まだまだ穴をなければならない部分が今日の中国の博物館学研究の関心点だと考える。

第二節　中国博物館学の構築の濫觴

前項目では、学科と学問の構築の理念について論述したが、次に中国の博物館学の構築の始動期を検討する。

確かに、1905年に張謇が創設した南通博物苑から、中国の博物館界は、広義の意味での博物館学についての研究を意識的に発展させた。しかし、これらの研究は、纏まることなく巨視的な理論体系を構成し得なかったことは事実であった。

大学での学問としての位置を確立されることなく、実践活動での応用知識でまとめようとしても、合理的な体系としてまとめることはできなかったのである。

また、これら自身の実践によっての理論は、特殊性が強く、全国に押し広める共通の意味が少ないと言った弱点を有していた。つまり、発展の客観的な法則性によって、理論が実践より遅く、さらに普遍的な理論の構築に時間を要したところから、十分な推敲による結果に到達することできなかった。

この停滞の状況は、必然だと考えられる。なぜならば、当該期は中国の博物館学は未熟であったところから、博物館学の構築の段階には到達しえなかった時代であったと考えられるからである。

1935年から、中国の博物館学界は、中国の博物館学研究の学術化と標準化を目指して、具体的に博物館事業の発展変化を試みると同時に、欧米からの博物館学を中国の文化に整合した中国博物館の確立に邁進した。また、当該期の中国博物館学者たちは、学問を構築する意識の初歩的萌芽を抱きながら、実践した時代であったと指摘できよう。

第三章第一節の「学問の構築とその標識」で記した如く、博物館学を構築する基準は、基礎理論・学術団体・学術著述・専門教育・科学研究・学術交流である。

①基礎理論

基礎理論においては、公衆教育の機能が最も中心課題におかれている。たとえば、「中国博物館学科発展の回顧と反省」[22]によれば、楊鐘健が提起した「三使命」という理論学説が、博物館学の発生段階で最も影響力を持つ論説であると述べられている。楊は、早期の中国の博物館学理論の輸入と博物館の実践に助力した。博物館学構築早期の中国の博物館学にとって、重要な学者である。楊が唱える「三使命」は、研究・教育・保管の博物館設立の目的理念に対して、博物館の機能をそれぞれ研究・教育・保存に対応することを明確に提唱した。当該理論は、基本的な博物館学理論の構造をすでに備えており、当該期およびその後の博物館学研究に大きな影響を及ぼしたが、特に自然類と科学技術類の博物館を創立して科学的な知識普及を行うことに活用された。

②学術団体

学術団体においては、1935年に中国博物館協会が発足する。本協会は、中国で初めての博物館学に関する専門的な研究をすることを目的とする学術団体であった。その成立の具体は、中国の博物館学研究を組織立て、さらに標準化と専門化を諮る礎になった。

③学術著述

学術著述においては、博物館学界の学者は、専門的な角度から博物館学を探究し、西洋の先進的な博物館学の理念を鑑として、中国の博物館事業の発展を促進させる目的で論著の執筆がなされた。共に1936年に出版された費畊雨と費鴻年が著した『博物館学概論』や陳端志が著した『博物館学通論』は、中国の博物館学研究において指導的働きをした著述である。確かに、この２冊の著述内容は、日本と欧米の博物館学理念を大量に参考し、あるいはそっくりそのまま取り入れた

内容であったと言えよう。しかし、この行為も、中国の博物館学の枠組みを構築する為の自主的探究の第一歩であったと把握できよう。

清朝末に博物館のことが、西洋から中国に入って来たが、それよりもやや遅れて博物館学の著述が刊行された[23]。しかし、これらの著述が言及した内容は、博物館の具体的博物館活動を拠り所とした狭義の内容であり、博物館学全体を見渡す巨視的視座では決してなかった。博物館学を系統的に紹介した最初は、博物館学の通論的な単行本の刊行であることは言うまでもない。博物館学の通論的な単行本は、中国の博物館学を系統的且つ帰納に整理した書籍であったが、確かに、この通論的な単行本は、不充分のところが認められる。

この点は、中国の博物館学者が中国の博物館学を意識的に構築しようとした努力の成果であり、その積極性と進歩的な価値は認められるべきである。さらに、現段階での中国の博物館学の構築に指導と警告を齎す作用があったものと看取されよう。

④1935～49年までの中国博物館学の通論的単行本

第一章において記したように早期の中国において出版された博物館学の通論的な単行本は、『中国博物館学研究著述目録』によれば、1935年から1949年まで、中国の博物館学の通論的な単行本は、５冊に留まる。

当該期の中国博物館学は、中国博物館の特色を発展させることなく、主に日本と西洋の博物館学の観点を吸収咀嚼したものであった。当該期の通論的な単行本は、日本と欧米の博物館学の紹介と模倣であろうが、これも中国の博物館学者が博物館学科の構築を初めて意識的に探求し、博物館学に関する様々な問題を巨視的に把握した結果であり、歴史的な成果なのである。中国の博物館学界は、中国の博物館学の構築の沿革を窺えることを期待し、さらに、博物館学のシステムをさらに完備し、中国の博物館学の発展に期待するものである。

本稿は、この五冊の博物館学の通論的な単行本に基づいて、当該期の中国博物館学の構築について検討する。

A.費畊雨と費鴻年、共著に拠る『博物館学概論』

『博物館学概論』は、中華書局が1936年に費畊雨と費鴻年により上梓され、主に博物館の発展史と博物館実務の概況を紹介した書である。

本書は、13章からなり、主に西洋の博物館史、博物館分類と博物館の応用を紹介したものである。費鴻年は、序言の中で次の如く記している。

> 博物**馆**在社会教育上占一极重要的地位，（中略）主其事者往往缺乏博物**馆**的常**识**，以致有博物**馆**之名，而不能**举**博物**馆**之**实**的，比比皆然。（中略）余**觉**此种**书**籍的必要，（中略）如能有益于教育界，**则**此**书**之作，就不失其意**义**了（后略）
>
> 博物館は、社会教育の中に在って、極めて重要な地位を占める。（中略）

その主事者は、往々に博物館の常識が欠ける。その結果は、博物館が名ばかりあって実質が伴わなかった。（中略）私は、この種類の本が必要と思っている。（中略）教育界に有益であれば、本書は、意味を失わない。（後略）（筆者訳）

以上からも明白であるように、本書の主な目的は、博物館の常識を普及させ、博物館の社会教育の意義を重視することである。そして、序言の中で、「（本书是）以日人棚桥氏所著《诉于眼的教育机关》为蓝本。（（本書は）日本人の棚橋源太郎が著した『眼に訴へる教育機関』を底本として著したものである。 筆者訳）」と明記しているところから、棚橋源太郎の博物館理論に対して一定の評価をしていることも推し量られる。

B.陳端志編著『博物館学通論』

『博物館学通論』は、上海市博物館が1936年に刊行したものであり、中国で初めての博物館理論と博物館経営（実務方法等）を系統的に論述した単行本である。本書は、陳端志による単著である。

胡肇椿は、本書の序言で、博物館の基本使命を次の如く記している。

（欧美）博物馆无问规模之宏陋，靡不活跃于民众智识之普遍，与高深研究之策进；其影响于国家之隆替，民族之兴靡，夫岂偶然！建国以来，内患外侮，曾无宁岁，于国家百年之计，遂多疏略，而博物馆事业之运动，亦感蹉后。比岁之间，当轴诸公。奋斗于国家兴亡忧患之间，益事于生聚教训为民族复兴之算，而博物馆事业为普及教育、提高民族意识、增进研究精神之要途，提倡之责，要不容懈。

（欧米の）博物館は、規模の如何によらず、民衆に知識の普及と研究を深めることに力を入れた。それは、国家と民族の栄枯盛衰を影響することが偶然ではない。建国以来、内憂外患があり、平穏な年がないから、国家に関する百年の計が疎略した。博物館の事業も停滞した。このような時、我々は、国家の興亡と憂患を着て、民族復興の計算を考える。博物館の事業は、教育を普及すること、民族意識を高めること、研究の精神を増進することである。この責任を提唱して、怠慢を許さない。（筆者訳）

以上からも明確であるように、当該期の中国博物館学界は、博物館に嘱望され、国家の滅亡を救い、民族の生存を図る歴史的な意味を与えた面も多分に存在する。

さらに、著者の陳は自序の中で、本書刊行の意義について次の如く記している。

其（研究博物馆的书籍）在吾国，除若干种品目刊物及偶或散见于报章杂志的论文外，尚无较有系统的专书。（中略）本书出版，视为吾国博物馆学的一

个前哨也可。

（博物館を研究する書籍は、）中国において、いくつかの品目の刊行物や、新聞と雑誌に論文を偶々散見することを除いては、いまだ系統的な単行本がない。（中略）本書が出版されることは、中国の博物館学の前哨である。（筆者訳）

つまり、本書が上梓されることは、中国の博物館学にとって初の系統的な専門書となり得ることである。この点も、当該期の中国博物館学界が博物館学科を意識的に構築している表現である。

本書は、18章を立章し、主に博物館学の理論知識と博物館の実際の応用操作を紹介した本格的とも表現できる博物館学の書籍であった。

C.陳端志が編著した『博物館』

『博物館』は、商務印書館が1937年に刊行したものであり、主に博物館の基礎理論と構築の具体的な活動を論述して、理論的な面から博物館設立の計画に関する指導を行う書であった。本書は、５章から構成され、主に博物館運営の実際の操作に関する課題を検討する。

D.荊三林が編著した『博物館学大綱』

『博物館学大綱』は、荊三林の執筆による単著で中国文化服務社陝西分社が1941年に刊行したものである。荊は、自序の中で本書の編著目的を明示するなかで、博物館の重要性を説明することを最大の目的とすると述べている。そのため、博物館学の他の内容、具体的には博物館の諸機能である収集、展示などの内容については言及しないとしている。故に、本書が関連する博物館理論面も限界であり、主として博物館学の理論を主題とし、実務面に関しては内容を簡単に言及するに留まっている点が編纂上での特質である。本書を編著した直接的な原因は、「（关于博物**馆**的**论**述）算来算去，**总**计不**过**一二十篇，看**这**是多**吗**的恐慌阿。（博物館学についての著述が約二十編を数えるに過ぎないことは、余りに博物館学についての著述が少なすぎ，恐慌させることである。 筆者訳）」と述べている点はから、荊は博物館学の社会的啓蒙を目的として著述したものと理解できよう。

さらに、深い理由は、「**现**代的**战**争，是文化的**战**争。文化落后的民族，只有作奴隶，文化落后的国家，只有被**灭**亡。（現代の戦争は、文化戦争である。文化が落後している民族は、奴隷としてしか在り得ず、文化が落後している国家は、滅亡しているだけだ。 筆者訳）」と述べ、民族が保持する文化の重要性を強調し、それを発見し保存し大衆に見せることが出来るのが博物館であり、その意味でも博物館の国家的な重要性を記した点が特徴であると指摘できよう。本書は、６章から成立するが、主に博物館の保存・研究・鑑賞の機能論と陳列方法に関する博物館機能論を論究するも、その実務面には触れていない。荊の博物館学思想は博物館展示を中心とする博物館機能論であることを窺い知る。

E.曾昭燏と李済の共著に拠る『博物館』

『博物館』は、曾昭燏と李済の共著で、国民党が経営し当時南京にあって現在は台湾に移転した出版社の正中書局が1943年に刊行したものである。主に博物館の実務面に偏重している点が本書の特質であり、博物館の様々な業務にとっては指導的な書籍ということができる。

本書は、10章から構成され、博物館の実務面とは別に、主に戦時における博物館の対応方法が比較的詳しく論述されている。

1931年の満州事変を契機に、関東軍による侵略が開始され中国東北全域が支配された。1933年、日中戦争の戦火を避けるために、北京の故宮から大量の貴重な収蔵品は現在は南京博物館である中央博物院への避難がなされた。やがて、南京にも戦火は及び戦火を避ける為文物は、再び移送されることになり、多くは当時四川省の重慶、現在は重慶直轄市の巴県（80箱）・峨眉県（7287箱）・楽山県（9331箱）に所在した祠堂・寺・岩窟などの場所に運ばれて保存された。

例えば、楽山県安谷郷の朱潘劉三氏祠・宋氏祠・趙氏祠・陳氏祠・易氏祠・梁氏祠の６ヶ所の祠堂と峨眉県の武廟・巴県の飛仙岩（碑金岩）であった。

この際、曾は欧州諸国の戦時における博物館の先例を紹介し、被占領地区には文物の保護を要務にして、他の地区には教育事業を要務とした。具体的な、戦時における博物館事業は、被占領地区においては従来通りの博物館事業を続ける上で、文物の保護が最も重要な任務になっていた。そして、短期展覧会を開催して、博物館の宣伝事業を止めてはいけないと主張した。他の非戦闘地区では博物館が教育機関として、教育事業を継続させたのであった。学校数が不足のため、博物館の建物は、学校として使用するなどの苦難に見舞われたことなども詳細に記されている。

⑤1942年の専門教育機関に於ける博物館学講義

専門教育機関なれる博物館講義の最初は、前述した『博物館学大綱』（1941年）の著者である荊三林が、1942年に国立社会教育学院で設けられた図書館博物館学専攻課程で“博物館学”を講義したのが中国における大学での嚆矢であり、中国での博物館学から博物館学科への記念的昇華であったと評価できよう。

大学で博物館専攻を開設することは、大学での講義と通して中国での博物館学の専門者を養成することができ、博物館学の学術化と専門化を齎す原因となった。

上記のこれらの事実によって、中国の博物館学の構築意識は芽生え始め、実践の開始も確認される。

「中国博物館学科発展の回顧と反省」[24]によると、博物館学が学術名称として使用されるのは、1930年代のことである。これが、中国の博物館学の構築の濫觴と看取される。1935年に中国博物館協会が設立され、博物館学や博物館学教育などの学術の概念を明確に規定して、強烈な学問の意識を表現したのであった。このことも一つの契機として、博物館学は専門的な学術科目として研究され始めた。

その研究は、目的性と組織性を持っており、博物館学問の構築と博物館実践の両面を意識的に行ったのである。

以上の理由に基づいて、中国の博物館学の構築の嚆矢は、1935年に認めることができると考えるものである。

結章

1905年に張謇が南通博物苑を創立したことは、中国人が自主的に博物館事業を実践し始めた歴史的事実であり、これはまた中国博物館学の濫觴であることは指摘した通りである。

昔日の中国には宝殿や蔵宝室はあったが、近代的意識を持っている博物館は、西洋から伝えられたものである。南通博物苑の設立は、中国における博物館の中華化の幕開けであった。

これを契機として、中国では中国博物館学に関する理論の検証と実践が勢いをもって発展している。博物館学の実践的技術を蓄積することを通じて、博物館学の構築の必要が理解されるに至った。

1930年代に中国博物館学界は、博物館学に関する基礎理論を提唱し始め、中国博物館協会が設立され、博物館学に関する学術著論が刊行され、大学で博物館学コースを開講し始めた。これは、中国博物館学の構築の嚆矢である。

1935年に中国博物館協会が設立されたことは、博物館学に関する研究が学術団体での検討段階に入ったことを示す記念的な設立であった。これから、中国博物館学の構築は、さらに拍車がかかり順風満帆といっても過言でない程の急速な進捗で現在に至っている。

おわりに

中国博物館学の濫觴期は、大きな社会変革を背景にして展開したという歴史を有している。それ故、当該期の中国博物館学に関する研究には様々な問題点が看取されるが、その具体的な内容は、今後の課題として期を得て記す所存である。

註

（1）項隆元2013「博物館学用語の標準化について」『東南文化』（01）p.107

（2）国家文物局1979『省・市・自治区における博物館工作条例（草案）』

（3）「三性二務」とは、「三性二務」論であり、1956年に北京で開催した中国の第１回全国博物館仕事会議の中で、提唱した中国博物館の基本的な性質と基本的な役割の理論である。具体的には、中国博物館の基本的な性質は、科学研究機関・文化教育機関・有形文化財と無形文化財及び自然標本の収蔵室である。（科学研究机关、文化教育机关、物**质**文化和精神文化**遗**存以及自然**标**本的收藏所）中国博物館の基本的な役割は、科学研究と人民のために尽くすこと

である。（**为**科学研究服**务**，**为**广大人民服**务**）

（４）費振倫1985『中国博物館学概論』文物出版社

（５）中国大百科事典編集委員会1993『中国大百科事典・文物博物館巻』中国大百科事典出版社

（６）宋向光2004「博物館定義の時代発展の特徴」『国際商報』（02）18006

（７）段勇2010『中国博物館学研究著述目録』新華出版社

（８）費畊雨・費鴻年1936『博物館学概論』中華書局 p.30

（９）陳端志1936『博物館学通論』上海市博物館 p.4

（10）陳端志1937『博物館』商務印書館 p.4

（11）荊三林1941『博物館学大綱』中国文化服務社陝西分社 p.1

（12）曾昭燏・李済1943『博物館』正中書局

（13）王宏均・馮承伯1993「博物館学」『中国大百科事典・文物博物館巻』

（14）王宏均2001『中国博物館基礎』上海古籍出版社 p.3

（15）梁吉生2006「博物館現地化の発展及び進路」『中国文物科学研究』p.14

（16）王宏均2001『中国博物館基礎』上海古籍出版社 p.20

（17）国家文物局博物館学討論会1981『博物館学概論（質問稿）』国家文物局博物館学討論会

（18）文化部文物局1985『中国博物館学概論』文物出版社

（19）黄亦兵1989「博物館学科の属性に関する初歩的な探究―及び範広傑先生と検討すること」『中国博物館』

（20）陳建明2001「中国博物館学史の構築を展開することについて」『中国博物館』p.47

（21）王宏均2001『中国博物館基礎』上海古籍出版社 p.14

（22）徐玲2014「中国博物館学科発展の回顧と反省」『東南文化』

（23）註22と同じ

（24）「中国博物館学史」課題グループが撰した「知識・理論・体系・学科――中国の博物館学研究の軌跡検分」によれば、19世紀40年代のアヘン戦争から20世紀初頭まで、中国において数十人が様々な文章の中で、「博物院」や「博物館」という言葉を言及し、記載した博物館の名称が100館を超えた。1905年以前の近代新聞は、海外博物館と博覧会についての報道が20種類の新聞に300編以上の文章が掲載されていた。「博物館」という言葉の中国語に翻訳した初登場は、林則徐が纂訳した『四洲志』という本の中である。そして、郭嵩煮、康有為、陳宝泉を代表とする学者らは、博物館の内部発展及び運営規則を深く研究し始めた。例えば、康有為が著した『イタリア紀行』『保存中国名迹古器説』と陳宝泉が著した『天津教育品陳列館議紳の陳宝泉上週総辦の意見書』。